

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 16 日現在

機関番号：13201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884028

研究課題名(和文) マルク・リシールを中心とした現象学運動における病理的現象の研究

研究課題名(英文) "Pathological Phenomena in the French phenomenological movement : starting from Marc Richir's phenomenology"

研究代表者

澤田 哲生 (SAWADA, Tetsuo)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：60710168

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)： 「マルク・リシールを中心とした現象学運動における病理的現象の研究」というテーマの下、平成26年度(本課題最終年度)は、リシールの統合失調症に対するアプローチを研究した。(1)彼が自分の構築した現象学概念を用いて、統合失調症の諸症状(妄想、幻覚、自動運動)をどのように論じたのか、(2)そこには哲学・人間学的にどのような意義と価値があるのか この二点が具体的な研究作業となった。

研究成果の概要(英文)： In this year, we studied Marc Richir's phenomenological approach to schizophrenic disorder in the program "Pathological Phenomena in the French phenomenological movement : starting from Marc Richir's phenomenology" This study aimed 1) firstly to clarify his analysis of schizophrenic disorder (delirium, fantasy and automatism) and 2) finally to present the philosophical signification of phenomenological analysis of pathological phenomena.

研究分野：哲学 現象学 病理学

キーワード：リシール 現象学 統合失調症 理性 空想 身体 志向性

1. 研究開始当初の背景

(1) リシールの現象学

ベルギー出身の現象学者マルク・リシール (Marc Richir) の著作と議論は、今日のフランスおよびヨーロッパの現象学研究において極めて重要視されている。ドイツ観念論 (カント、フィヒテ、ヘーゲル) の研究から出発し、フッサールおよびメルロ=ポンティの現象学とハイデガーの存在論の批判的な研究を経て、独自の現象学を構築した後、彼は、2000年代から精神病理学 (ルートヴィヒ・ビンスヴァンガー)、精神分析 (ジークムント・フロイト、メラニー・クライン、ドナルド・ウィニコット)、等々の領域で議論された病理的な現象 (神経症、倒錯、精神病 [躁鬱、メランコリー、統合失調症]) を分析することで、現象学の諸概念を病理的な状況にまで拡張しようとしている。リシールの現象学の特殊性と重要性は、2004年に出版された『空想、想像、情動性』と以後の諸論文 (《Pour une phénoménologie des racines archaïques de l'affectivité》, *Annales de phénoménologie*, 2004, 《De la négativité en phénoménologie》, 2013, etc.) に確認することができる。彼は、神経症、倒錯、精神病 (躁鬱、メランコリー、統合失調症) の各症例を入念に分析することで、現象学の諸概念、とりわけ「身体」の概念を再構築しようとする。精神疾患の患者に固有の「身体」を、リシールは「ファントム身体 (Phantomleib)」と定義し、各症状におけるその展開の仕方を微細に記述している。現象学は、フッサール以来、「知覚」と「認識」という健全な生の側面を重要視してきた。これに対して、リシールは、トラウマや外傷を、分析対象として採り上げ、現象学の概念を人間学的に拡張しようとするのである。これが、彼の現象学の重要性である。

(2) 研究の背景

病理的な現象の分析を通じて、現象学の諸概念を更新する試みは、本研究代表者 (以下、代表者) の研究にも対応している。2012年に公刊した単著書 (『メルロ=ポンティと病理の現象学』、人文書院) の第三部で、代表者は、メルロ=ポンティの病理的現象へのアプローチが現象学の概念の更新を企図していることを指摘した。しかし、現象学の諸概念の更新という企図のなかで、彼が参照する症例は、神経症 (フロイトが分析した症例ドーラ) に限定される。倒錯および精神病圏の症例 (躁鬱、メランコリー、統合失調症) に関して、メルロ=ポンティは十分に論じておらず、議論の余地が残されている。リシールの現象学は、神経症、倒錯、精神病をそれぞれ詳細に分析することで、現象学の概念をより包括的な視点から拡張しようとしている。こうした学術的な背景の下で、代表者は、彼の現象学と病理学を研究対象とした。

2. 研究の目的

本研究は、「マルク・リシールを中心とした現象学運動における病理的現象の研究」と題し、フランスの現象学者マルク・リシール (Marc Richir, 1943-) の現象学と病理学を主たる研究対象とした。リシールは、存命中の哲学者であるが、この10年の間に、彼の現象学、哲学、人間学、等々を論じた研究書、研究論文、学位論文が多数発表されている。リシールは、フッサール以来知覚と認識に立脚した健全な人間観のなかにあった現象学を、病理的な地平に定位し直し、独自の現象学を構築した。彼の病理的な現象の分析を検討することで、彼の現象学の思想史上における特殊性を考察し、アリストテレス以来問題とされてきた、哲学における病理的現象の位相と意義を提示することが、本研究の目的であった。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、本研究は次の四つの問題を研究テーマとして設定した。リシールは、症例をどのように解釈したのか。言い換えるなら、彼の解釈の独自性はどこにあるのか。次に、リシールは、症例を参照することで、どのように現象学を構築し直そうとしたのか。つまり、それまでの現象学と比較して、彼が症例の分析から再構築した現象学にはどのような特殊性と独自性があるのか。リシールは、精神病理学と精神分析領域の症例を数多く参照するが、これらの領域のなかで、病理的な現象はどのように定義されていたのか。哲学史のなかで病理的な現象はどのように分析されてきたのか。この四点の研究テーマのうち、本研究では、とが主要な研究テーマに位置付けられた。とは、とのテーマから得られた成果を証明するために、つまり、その学術上の相対性を確保するために設定された。

4. 研究成果

(1) 平成 25 年度：研究活動の始まりと展開

平成 25 年度は、リシールが病理的現象について分析した著作を精査・読解する作業を行った。この作業を円滑に進めるために、大阪大学人間科学研究科の村上靖彦准教授（当時）の研究室で、同大学院の院生および研究者たちと、ひと月に一度、リシールの思想に関する研究会を行った。その成果として、日仏哲学会の研究大会（下記学会発表）で、リシールの哲学と病理的現象の関係に関する研究発表を行った。またフランスの『現象学年報』誌で発表した論文（下記雑誌）では、フランスの人類学者・心理学者ジョルジュ＝アンリ・リュケの児童絵画論を材料とすることで、リシールの現象学の妥当性を立証し、翌年度の研究の指標を示した。

(2) 平成 26 年度：前年度の研究成果の公

刊と研究のまとめ

平成 26 年度は、前年度の研究活動を継続しつつ、リシールによる統合失調症の現象学的アプローチに関する研究に着手した。

前年度の研究成果として、リシールによる神経症の現象学的分析に関する研究を所属大学の紀要雑誌（論文）に、彼の倒錯へのアプローチに関する研究をベルギーの雑誌（論文）に発表した。また彼の現象学と病理学の関係について、年度の初めにポルトガルのコインブラ大学で開催された国際ワークショップで（学会発表）研究発表を行った。

リシールの統合失調症へのアプローチに関する研究については、その妥当性を立証するために、フランスの『現象学年報』誌に論文を発表した（論文）。この論文では、ピンスヴァンガーが分析した統合失調症患者の症例を、カントの観念論およびフッサールの現象学を理論的な枠組みとして示すことで、その延長線上にあるリシールの思想と現象学的方法の妥当性を提示した。また同時期に、日本メルロ＝ポンティ・サークルの 20 周年シンポジウムの提題者として、後期メルロ＝ポンティの思想に関する研究発表を行った。メルロ＝ポンティはその後期思想のなかで、幻想や幻影という概念を提示しており、リシールはこの思想家から多くの発想を得ている。この研究発表は、本研究の思想的な妥当性を与えるために行われた。

その後、リシールの統合失調症へのアプローチに関する研究を、コインブラ大学で開催された国際ワークショップの学会記録に投稿した（来年度公刊予定）。さらに本研究の総決算として、平成 26 年 11 月 30 日、日本現象学会の研究大会で、リシールの現象学と病理学をめぐるワークショップを開催し、研究発表を行うことで（学会発表）本研究は終了した。

研究の成果を総括すると、両年度の研究活

動をとおして、リシールが論じた精神疾患の三類型（神経症・倒錯・統合失調症）に関する研究はすべて行われた。研究方法の箇所（上記3）で示した研究内容のうち、
は遂行されたことになる。 に関しては、学会での研究発表（下記学会発表、 ）および公刊した論文（下記研究発表、 ）のなかで、ある程度論じることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

Tetsuo Sawada, 《Machination et la moindre vie》, *Volume Marc Richir à Coimbra* (仮題), 査読有、Faculté d'humanités de l'Université de Coimbra (Portugal), 2015年公刊予定

澤田哲生、「ほつれと浸食 後期メルロ=ポンティの思索の始まりと展開について」、『メルロ=ポンティ研究』第19号、査読有、日本メルロ=ポンティ・サークル編、2015年9月公刊予定

Tetsuo Sawada, 《Idéal et Verstiegheit dans la psychose》, *Annales de phénoménologie*, n° 14, 査読有、Amiens, Association pour la promotion de la phénoménologie, 2015, 277-296

Tetsuo Sawada, 《Du phénomène de perversion dans la pathologie transcendante de Marc Richir》, *Revue internationale Michel Henry*, n° 6, 査読有、Louvain (Belgique), 2014, 161-175

Tetsuo Sawada, 《Phénomène d'aphonie et *Phantomleib*: sur la pathologie phénoménologique de Marc Richir》, 『富

山大学人文学部紀要』第61号、査読無、富山大学人文学部、2014年、21-40

Tetsuo Sawada, 《La variation imaginaire dans le dessin enfantin》, *Annales de phénoménologie*, n° 13, 査読有、Amiens, Association pour la promotion de la phénoménologie, 2014, 159-179

澤田 哲生、「メルロ=ポンティと反遠近法の現象学」、『メルロ=ポンティ研究』第17号、査読有、日本メルロ=ポンティ・サークル編、2014年、41-53

〔学会発表〕(計4件)

澤田 哲生、「生き生きとしつつ、いびつな生 マルク・リシールのファントム身体論」、『日本現象学会第36回大会 ワークショップ「現象学と病理学 マルク・リシールをめぐる」』、2014年11月30日

澤田 哲生、「ほつれと浸食 後期メルロ=ポンティの始まりと展開に関する一考察」、『日本メルロ=ポンティ・サークル第20回大会 20周年記念シンポジウム「メルロ=ポンティ研究のこれまでとこれから」』、2014年9月20日

Tetsuo Sawada, 《Illusion comme phénoménalisation et horizon anthropologique》, *Workshop international: 《La pensée de Marc Richir》*, Faculté d'humanités de l'Université de Coimbra, 2014年4月1日

Tetsuo Sawada, 《Illusion et apparence : sur la nouvelle fondation de la phénoménologie chez le jeune Richir》, 日仏哲学会、京都大学、2014年3月29日

〔図書〕(計0件)

無し ()

研究者番号 :

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

(3)連携研究者

無し ()

研究者番号 :

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

取得状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

無し

大阪大学人間科学研究科の村上靖彦准教授の研究室で、マルク・リシール研究会を組織し、月例で開催した。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

澤田 哲生 (SAWADA, Tetsuo)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号 : 60710168

(2)研究分担者